

ロシア疑惑というペテンについて我々がまだ知らないこと

【訳者注】これが我が国のある TV ニュースで、簡単に報じられたとき、ブレット・キャバノーという最高裁判事候補者の、高校生時代の性的暴行事件とされるものが、ペアになっていた。これは見ても恥ずかしくなる、見え透いた中傷事件だったが、私はたまたま、彼の名誉のために、100人近くの、当時の彼の同級の女子学生が、登壇して口々に、彼が人格者だったと発言するビデオを見ていたから、これが100パーセント嘘とわかった。しかしこれを見ず、このニュースの項目だけを見ていた人は、キャバノー氏をそのような男と覚えこんだであろう。これは悪意で人の名誉を傷つけ、二度と立ち上がれなくすることは非常に簡単だという例である（キャバノー氏の場合は、幸い、承認投票数が十分で、そうはならなかった）。

これと、ロシア（プーチン）-トランプの「癒着」と言われる事件は、よく似ている。この関連の本当のニュースや、コーエン教授の説明する本当の事情を読まなければ、人はこれを本当のことと思うだろう。そしてこれを本当とことと思わせたいアメリカの勢力の追随国家は、どうしてもそれを本当だと信ずるだろう。北方領土交渉などは、一対一の関係で決まることではない。プーチン大統領はどこかで、自分は毅然とした国家でなければ付き合いたくない、と言っていた。これは、ロシアに媚を売る国家もそこに入るという意味になる。

Stephen F. Cohen

September 5, 2019, Information Clearing House



これは何度でも強調しなければならない：——アメリカ大統領の歴史上、これほど毒のある風評にさらされた例を思い出すことができない。初めは大統領候補として、次には大統領として、ドナルド・トランプが、2016年大統領選に勝つために、クレムリンと「癒着し

た」という言いふらされた事件のことである。しかも、「アメリカの脅威ナンバー・ワン」であるプーチン政権が、トランプの信用を落とす証拠を持っていて、彼が彼らの「傀儡」だったという悪意ある噂が流された。あるいは、もっとたちの悪い風評があった。

ロシアが世界的なトラブルにおいて、アメリカの最大の脅威であるという、誤った定見は別にするとしても、このような主張のどの側面を取っても、それが本当だったことはない。それは最初から明らかだった。この主張の多くの根拠となっている、いま悪名高くなった Steele Dossier（スチール文書）の要点は、「証明不可能な」だけでなく、それ自体明らかに、ありそうもないことだった。

例えば、長い間、国際的なホテルの所有者と経営者をやっているトランプが、所有者でも支配者でもないモスクワのホテルで、無分別な行動をするなど、考えられるだろうか？ あるいは、スチール自身が言うように、高レベルのクレムリンのソースが、ひどい反トランプの情報を彼に与えるだろうか——彼らの警戒するボスのプーチンが、トランプを選挙に勝たせたいと思っているというのに——。にもかかわらず、アメリカの主流メディアや、他の政治体制の要人たちは、3年近くもスチールの主張を信頼してきた——むしろ彼を英雄化し、ある者たちは今でも陰に陽にこれを信じている。

当然のことだが、前特別顧問ロバート・ミュラー（マラー）は、トランプの選挙運動とクレムリンの間に何の「癒着」の証拠も見出さなかった。ロシアの「干渉」が、2016年選挙の結果に、いかなる意味でも影響を与えたという、どんな信頼できる証拠も提出されなかった。また、ロシアのこの選挙への「口出し」は、広く言われているような、「デジタル・パールハーバー」のようなものでは全くなかった。それは明らかに、ビル・クリントン大統領の、1996年の、ロシア大統領ボリス・エリツィンの再選を確保するための、政治的・財政的「干渉」より遥かに小さく、「口出し」のようなものではなかった。

にもかかわらず、ロシア疑惑の主張の核心は、アメリカ政治の生命において、レジェンドのように執拗であり——メディアの解説でも、民主党候補者の議会への財政請求でも、通常なら常識的な人々の間でもそうだった。そのようなレジェンドを追放し、根絶するための唯一の方法は、それがどのように、誰によって、いつ、なぜ始まったかを、よく知り、暴くことである。

.....

しかし問題は残る：——なぜ、西側の情報局は、米情報局に指導されているのは明らかとはいえず、トランプの選挙運動を妨害しようとしたのだろうか？ 条件反射的な答えは、候補者トランプは、「ロシアと協力する」ことを約束して、緊張緩和の外交政策を進めようとする

る、ということかもしれない。しかしそれは、驚くほどのことでなく、まして共和党大統領に、革命的な政策などというものではなかった。20世紀のすべての主要なデタントのエピソードは、共和党大統領によって率先された：アイゼンハワー、ニクソン、レーガン。

そこで再びトランプについて、本当のところはどうだったのか？ あたかもこれは、常識の限度を越えて、幽霊を幽霊化するような話で、しかもそれがアメリカ大統領の深い政策の話になってしまった。司法長官ウィリアム・バーに統率されている調査は、答えをもたらすかもしれないし、もたらさないかもしれない。バーはすでに、ジェイムズ・コーミーに対する起訴を済ませている。コーミーは、オバマ大統領下のFBI長官で、トランプの下でも、しばらく同職を務めている。しかし、このいつも不運なコーミーが、大統領候補者に対して、まして大統領就任予定者に対して、このような大胆な策略を始めたとは考えられない。前から示唆しているように、私は、ジョン・ブレナンとジェイムズ・クラッパー（それぞれ、オバマの下でCIA長官と、米国家情報局長官）が、犯人としてより怪しいと考える。FBIはかつてそうであったような、恐ろしい組織ではもはやなくなっており、したがって調査は比較的易しくなっている——これはすでにバーが示した。他の部局、特にCIAは別の問題で、バーは、彼らは抵抗していると言っている。彼ら、特にCIAを調査するためには、彼はベテランの起訴調査官ジョン・ダラムを、連れてこなければならなかった。

これがまた別の問題を引き起こす。バーとダラムはともに、自分の経歴として米情報局と関係しているのだが、彼らはロシア疑惑の起源に関する真実を、暴く決意をしているのだろうか？ そしてそれを、十分にやり通すことができるだろうか——すでに明らかな抵抗を考えるなら？ たとえそうであっても、バーは、情報局の手強さをものともせず、彼らについての判決事実を公開するだろうか、それともそれを極秘扱いにするだろうか？ そして後者の場合には、トランプ大統領が特権を用いて、2020大統領選挙が近づくにつれて、判決の極秘扱いを解除し、オバマの大統領時代とその後継者の役割の、信用をぶち壊すだろうか？

おそらく同じくらい重要なのは、主流メディアが、バー - ダラム調査とその判決を、どのように扱うかということである。ロシア疑惑物語を、これほど長い間、しかも間違った扱いをしてきた後で——そして民主党にとって、おそらく判決自体が、抗弁するナラズ者情報局の立場に立たせるものだが——メディアは、その判決を信用するだろうか、信用しないだろうか？

もちろん、バーとダラムが、トランプに指名された者として、このロシア・ゲイト物語の、情報不祥事の、理想的な調査担当者でないことは確かである。よりよいのは、真に両党派の、上院議員をベースにした、独立した調査団であろう。1970年代中期の「教会委員会」

はその例で、アメリカの情報局が犯した深刻な虐待を暴露し、(その当時の考えで) 改革したことがあった。しかしそれには、かなり大きな芯をなす、党派性をもたない、高潔で、かつ勇気ある、両党の上院議員を必要とし、そういう者たちは今までのところ、いないようだ。

しかしそれでも、今進行中で、やがて起ころうとしている、民主党の討論がある。何よりも先ず、ロシア・ゲイトは、アメリカの政治システムの現在と未来に関わる問題で、ロシアの問題ではない。(実際、繰り返し論じてきたように、ロシア・ゲイトにロシアの関わる要素はほとんどない。) あらゆる「討論」または、そのような「フォーラム」において、民主党のすべての候補者は、このアメリカの民主主義に対する深刻な脅威について、問われなければならない——起こったことについてどう考えているか？ そしてもし大統領に選出されたら、それについてどうするつもりか？ これを我々の民主主義にとって、健康の要として考えよ。

——以上